

今のうちに神との関係を 詩編 32 編 1 節～6 節

32:01【ダビデの詩。マスキール。】

いかに幸いなことでしょう

背きを赦され、罪を覆っていただいた者は。

32:02 いかに幸いなことでしょう

主に咎を数えられず、心に欺きのない人は。

32:03 わたしは黙し続けて

絶え間ない呻きに骨まで朽ち果てました。

32:04 御手は昼も夜もわたしの上に重く

わたしの力は

夏の日照りにあって衰え果てました。〔セラ

32:05 わたしは罪をあなたに示し

咎を隠しませんでした。わたしは言いました

「主にわたしの背きを告白しよう」と。そのとき、あなたはわたしの罪と過ちを

赦してくださいました。〔セラ

32:06 あなたの慈しみに生きる人は皆

あなたを見いださうる間にあなたに祈ります。大水が溢れ流れるときにも

その人に及ぶことは決してありません。

今日は詩編 32 編 6 節の前半「あなたの慈しみに生きる人は皆、あなたを見いださうる間に祈ります。」という言葉に注目したいと思います。実はこの言葉は、前の訳の聖書(口語訳聖書)では、「すべて神を敬う者はあなたに祈る。」となっていて、「あなたを見いださうる間に」という言葉が抜けています。この抜けていた言葉は解釈が難しいようで、ヘブライ語で「レエトメソラク」と読むのですが、これでは意味が通じないということで英語の聖書などでは「レエトマソク」と読ませ「苦難のときに」と訳しているものもあります。「神を見出せるとき(つまり順境のとき)に祈る。」というのと「苦難のときに祈る」というのとでは意味が真逆になってしまいます。

「苦しいときの神頼み」という言葉があるように、苦難のときに祈るというのは分かる気がするのですが、しかし果たしてそうでしょうか。ある神学者は牧師をしていた頃の経験から、信徒たちは本当

に苦しいことに会おうと、教会に来なくなる、苦しいときには祈れないものだ、と言っています。そういう信徒の方々をわたしも見てきました。ですから、「神を見いだせる間に祈れ」というのは、正しい訳のようです。つまり順境のときに、今のうちに、神様との関係をしっかり築いておきなさい、ということでもあります。

このことで思い出すのがヨハネによる福音書12章35節です。イエス様は「暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。」と言われました。これも順境のときにこそ、しっかりとした信仰を、という意味であります。

子どもたちは純情で素直です。子ども時代にしっかりと親の愛、周囲の愛を与えてあげたいと思います。そうすればきっと、ひねくれずに、自分にも他人にも肯定的な人になれるでしょう。社会人になって、世間の荒波にもまれるようになって大丈夫なように、大人が愛してくれるうちに、つまり光のあるうちに、自己形成をしっかりとしなさい。と、こういう意味にも取れます。

けれども、聖書が言っていることは、こうした世間一般の教育論ではありません。なぜなら、詩編32編の詩人は、自分に絶望しているからです。1節から読んでみますと、この人は、神に背き、罪を犯し、幾つもの咎があり、絶え間なく呻き、衰え果てた人であることが分かります。愛に囲まれしっかりと自己形成のできる人ではなく、何のとりえもない、ボロボロの、自分に絶望している人であって、ただひとつ、神様の慈しみだけが頼みの綱となっている人なのです。神の慈しみに頼る人生、これがこの人の信仰生活です。

こうしてこの人は心の平安を得て、今を生きています。けれどもこの信仰は、苦難が襲ってきたとき、耐えることができるでしょうか。耐えることはできないというのがこの人の自覚です。だからこそ今、かろうじて信仰生活をしている間に、まだ余裕があるうちに、祈りの生活を確立すること、神様との関係を揺るぎないものにする必要を感じているのです。イエス様も「光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」(ヨハネ12:36)とおっしゃいました。つまり信仰をしっかりと確立して、苦難が襲って光が見えなくなったときに「光の子」となれるようにということです。では、そのためには、どうすれば良いのでしょうか。

もう一つ思い出す聖書の箇所があります。コヘレトの言葉の有名な箇所「汝の少(わか)き日に、汝の造主を記(おぼ)えよ」です。新共同訳で読んでみましょう。「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。苦しみの日々が来ないうちに。「年を重ねることに喜びはない」と言う年齢にならないうちに。」現代の教育論は、若い内に自己確立を勧める意味に取るでしょうが、聖書本来の意味は違います。「何のとりえもない」とうなだれている若者こそ、神の慈しみに生きる人生を確立するチャンスがあるということです。

某大学の就職課の職員が「今時の若者は就職しても続かない」と嘆いておりました。3ヶ月で、半

年で、辞めてしまうと言うのです。決して学生時代に優秀でなかったわけではありません。皆、自分なりに精一杯がんばってきた人たちです。なぜ辞めてしまうのでしょうか。色々事情はあるでしょうが、その一つに、自分をしっかり確立しすぎるということがあると思います。真面目すぎるのです。「概念としての自己」という言葉があります。自分はこうこうこういう人間である、こういうことをしてきて、こういう理想像を持っている・・・これが「概念としての自己」です。こうした立派な自己理解を、あまりにしっかり確立し、融通が利かないほどしっかり確立してしまうと、会社に入って、上司に怒られたりしたときに、理想の自分と現実とのギャップがあまりにも大きくて、賽の河原の鬼に、せっかく積み上げた石を崩されてしまうように、「概念としての自己」が崩れてしまうのです。必要なのは自己確立などではなく、神様の慈しみに生きる信仰を、若い内に確立することなのです。

この「概念としての自己」は、歳をとってからも苦しむ原因になります。今までしっかり自己を確立してきた人ほど、立派な人になろうと努力してきた人ほど、悩むことになります。ダメな自分が受け容れられないからです。記憶が衰え、体も自由にならなくなると、こんな自分を見られたくない、みじめな気持ちを味わいたくない、と教会に来なくなります。

だからこそ「汝の少(わか)き日に、汝の造主を記(おぼ)えよ」なのです。それは、今元気なうちに立派な自分を目指すのではなく、元気なうちに神様の「慈しみに生きる」ことを学ばなければなりません。つまり祈りを通して、神様との関係を確立することです。祈りというのは、ある意味何もしないということです。自分からは何もできない者として、神様の助けを、神様のみ言葉を、待ち望むこと、これが祈りの姿勢です。祈りは、自分に与えられるどんな良いことも、大きな良いことも、小さな良いことも、神様から受け取ることです。自分の成し遂げたことも、神様の業であると知ることです。祈りは弱い人のすること。その通り。でも弱い人ほど強いのです。パウロが、「わたしは弱いときにこそ強い」(Ⅱコリント12:10)と言ったのはこのことです。

ある著名な牧師が、牧会カウンセリングが必要なのは、苦しんでいる人だけではなく、順風満帆の信徒にこそ必要だ、と言いました。その時ほど危険なときはない、神の支えを忘れ、自分の欲望に生きてしまう、ということです。そして、その時ほどのチャンスはない、それは主を待ち望む謙虚さ、すべてを神様から受け取る心の貧しさを訓練する絶好の機会なのです。私たちは、小さな信仰を与えられました。それは吹けば飛ぶような信仰です。ですから今のうちに、本当の苦しみが襲ってくる前に、「主が与え、主が取られる」その時が来る前に、全身全霊を神様に委ねすべてを神様からいただく信仰を、どんな小さな事にも神様の恵みをキャッチする信仰を、自分に誇るべきものがあれば、それは神様からいただいたもののできるような信仰を、訓練したいものです。